

2020/8/23(日)

第3回「青年の夕べ」ショートメッセージ
「8月に想うこと」

飯島 信

8月は、戦争と平和のことを考える特別な月です。
日本だけではなく、世界の多くの国々でもそうです。
今回は、二つのことを申し上げたいと思います。
一つは言葉の問題、もう一つは、詩音さんによって提起された隣人を愛するという事を、
他国を愛することに関わらせて短く述べたいと思います。

まず言葉です。

8月15日を、ほとんど全てのマスコミは第75回目の終戦記念日として取り上げています。

しかし、私は、ある時から、終戦記念日という言葉を使わなくなりました。終戦ではなく、
敗戦記念日です。何故なら、終戦という言葉は、何か他人事のように、その言葉からは、歴史に責任を持つ主体を覚えることが出来ないからです。

例えば、隣国の朝鮮半島で使われている言葉を考えてみれば良いと思います。

韓国の8月15日は、解放記念日です。日本の植民地支配からの解放です。

この解放記念日と言う歴史的事実を受け止める言葉こそ、日本帝国主義の敗戦と言う言葉です。私は、8月15日を敗戦記念日と受け止めることによって、戦後の日本国民に与えられた諸課題が初めて見えるのだと思います。

しかし、敗戦後、連合軍総司令部（GHQ）による占領が終わると間もなく、敗戦は、責任主体を伴わない終戦という言葉に変えられて行きました。その結果、国民意識も、戦争に負けたと言う自覚が次第に薄れ、戦争が終わったと言う他人事のような感情が日本の空気を支配して行ったように思います。その結果、アジア太平洋戦争のA級戦犯とされた人々が次々に復権し、60年安保の時は首相としての力を持つに至ります。

ドイツとの違いを見せつけられます。

ドイツでは、ナチスを称揚する事は、法律によって許されていません。

ヒトラー時代を繰り返してはならないとの国民的合意があるからです。

それに対して日本はどのようなのでしょうか？

戦争の反省から生まれた政教分離の原則を否定する靖国神社国営化の動きに加えて、政治に責任を持つ者たちの参拝が繰り返されます。神社は宗教ではない。神社参拝は国民儀礼であるとして参拝を強制し、抵抗する者たちを次々に投獄した歴史を持っているにもかかわらずです。神社参拝の強制によって朝鮮半島では2,000名が獄に入れられ、51名が獄死しました。日本では、大本教やホーリネス教会、又上智大学や暁星中高への弾圧が知られています。

誰もが同じだと思いますが、私は言葉を大切にしたいと思います。

敗戦と言う言葉より、終戦と言う言葉を使う方が気持は楽です。

責任を覚える必要がなく、又、この言葉を聞く人々にとって抵抗なく聞ける言葉だからです。

しかし、敗戦と言う言葉を使う時、私たちは日本の過去の歴史に向き合い、戦後日本の与えられている課題が見え、さらに、侵略し、深い傷を負わせてしまったアジアの人々との新たな出会いの扉を開くことが出来るように思うのです。

次に、隣国を愛することについて述べます。

今日の昼間の礼拝でもお話したのですが、私の経験です。

それは、2003年、私が神学校の2年生の時のことでした。

どこの神学校でも、夏になると夏期伝道実習と言うプログラムがあります。夏の間、約2週間、ある教会に派遣され、その教会の牧師から牧会の訓練を受けるプログラムです。教師となるために課せられる教育実習の神学校版と考えれば良いと思います。

ただ、私が学んだ日本聖書神学校は、特別に、夏期伝道実習に代えて、希望者にはフィリピンの現地で学ぶプログラムがありました。私はすぐに応募し、フィリピンを訪れることになりました。プログラムは南の方のネグロス島で行われるのですが、飛行機はまずセブ島に着き、そこで一泊します。そして翌朝、フェリーで隣のネグロスに渡ることになっていました。

セブ島に着いた時は、もう夕暮れでした。夕食を終え、宿舎に向かう時にはすっかり夜になっていました。一行は10人前後であったでしょうか？ マイクロバスなどなく、私たち学生は小型トラックの荷台に乗って移動しました。

トラックは狭い道をほとんどいっぱい占めながら、かなりのスピードを出し、私たちは激しく揺さぶられ、荷台から落ちないように手すりにしっかり掴まっていたように思います。道の両側に軒を並べる家々には明りが灯り、その軒をかすめるようにして走っていました。すぐ目と鼻の先に次々と家が現れては消えて行きました。

その時です、暗がりの中から家々の中に浮かび上がる明りを見るともなく眺めていた私の心の中に、突然ある思いが浮かびました。

あの家も、この家も、明りの下では家族が皆集まって団欒の時を過ごしている。

その平和を、安らぎの時を、誰であっても、どのような理由があろうとも、奪うことは許されないと。そう思いました。初めての経験でした。

アジア太平洋戦争において、日本軍は、中国、朝鮮、フィリピン、マレーシアなど、数多くのアジアの国々を武力で侵略し、占領支配をして来ました。日本がアジアの盟主となろうとしたのです。日本を第一に価値あるものとし、そのためには日本以外の他の国はどうなっても構わない。それを国粹主義と呼びます。その考えによって、数え切れないほど多くのア

ジアの人々を犠牲にしました。この国粹主義を打ち破るもの、それこそが、私がトラックの荷台から見たフィリピンの家々の風景でした。明りのもとに営まれている平和を壊す権利は誰にもない。ましてや、日本を始めとした諸外国にあらうはずがない。

この考えに立ってこそ、私たちは全ての国と平和を土台とした関係を築くことが出来ると思ったのです。

愛すること、隣国を愛すること、それは、その国の人々の平和な生活を脅かすことなく、受け入れ、守ることです。自分がそうして欲しいと思うように、隣国の人々にもそのようにすること、それが愛することだと思います。

そして、この事は、他者との関わりにも言えると思います。

愛するとは、他者が最も大切にしているものを、理解し、受容しようとする事。自分がそうされたいと思うからです。

8月、私はそのようなことを考えていました。

以上です。